
■ギリシャ期の「12サイン」と「ハウス」の概念について

またまたリンクのご紹介をどうもありがとうございます。

>23: 北斗柄さん

>サインとハウスの関係というと、

地上の事柄＝ハウスとサイン＝天上の象徴

という構造になっていると思います。これは中国占術でも西洋占星術でも同じでしょうね

もちろんですとも～！なのですが。ですけれども。ご紹介をと思ってた古典ギリシア期の概念では。現在の占星術で言うところの「ハウス」という言葉自体の使い方、捉え方が。ちょっと異なっておりました。話がまた逸れますが。そのことについてもここでちょっと触れておこうかなと思います。

▼以下、拙訳にて。書籍より引用をします。

「伝統占星術の解説書」ジョセフ・クレイン：著 ARHAT：刊

「A Practical Guide to Traditional Astrology」by JOSEPH CRAIN：ARHAT

P.16～P.17 第2章 「アングルとハウス」より

おなじみの言葉である「ハウス」には、御幣があります。ギリシャ語のoikosは、住居などのような家を意味しますが、oikosは占星術的な意味でのハウスではなく、特定のサインの支配星（ドミサイル）に属するものなのです。獅子は太陽のためのハウスで、すなわちoikosであり、蟹ならば月のためのハウスです。（※注1）ある人が自分の「家／ハウス」にいる時には、その人はくつろいだ気分になれるし、自分のなじんだ環境にいると考えます。

ギリシャ人は占星術的なハウスに関して、toposという異なる言葉を使っていました。（私たちが言うなら地形学topographyの言葉です）toposは単なる「場所」という意味です。場所は、なじみのある環境である必要はありません。

おなじみの言葉ホロスコープは（ギリシャ語のhoroskopos「時間の起点the marker of the hour」に由来する）、単にアセンダントという意味にすぎませんでした。時にはアセンダントを、ただ「時間hour」と呼びます。アセンダントは、ちょうどよいその時間に自分の居場所を決めるのに使われます。そしてアセンダントは、自分の場所を作る働きがあります。

私たちはどのように自分たちの場所、toposを見つけるのでしょうか？より広大な範囲へ向かう参照点を設定するには、地図と羅針盤が必要です。参照点は、空の動きが東の地平線と出会うアセンダントでした。地図となるのは、ギリシャ人が12宮と呼んだ黄道帯の12サインの連続でした。

つまり。ギリシャ期に「ハウス」と言ったら。天の12宮を指していた模様であり。私たちが言うところの「ハウス」は、単なる「場所」という意味であったという訳であり。

惑星の住まい、家は12のサイン。その住まいを立てる場所が、今でいう「ハウス」ということで。ややこしいですが。これがとても面白いな～と自分は思うです。

惑星のエッセンシャル・ディグニティ&デビリティを決めるのは12のサインですから。惑星が自分の本来の家にいるなら（ドミサイル）。コンディションが良いのも納得で。他人の家で歓待受ければそりゃいい気持にもなるでしょうし（エグザルト）、妻の実家に行けば居心地も悪からうし（デトリメント）、迷惑をかけた相手の家に謝罪に出向いているなら。そりゃもう歓待どころか冷たい扱いに、気分もさぞや落ち込もうというものかなと（フォール）。

ギリシア期の、この、天の12宮が惑星の「ハウス」なんだよという考え方は。なんだか腑に落ちるのです。で。私たちが言うところの「ハウス」が、ただの「場所」という意味であるなら。それがどういう場所かを示すのが、古来から伝承されてきたさまざまな「意味や象徴」なのかなと。例えば4室が父親とか。7室が配偶者とかいう意味の分類です。

で、この私たちが言うところの「ハウス」である「場所」が、、、あーもう、ややこしいですね。以下では、現代占星術で言うところの「ハウス」を「今のハウス」に。ギリシア式で12サインを示す「ハウス」は「家」と書いて区別しますね。

で。「今のハウス」である「場所」の上に、敷地の上に、12サインという天上の「家」が建っている。そしてそれぞれの12のサインは特定の惑星の「家」である。というのが、上記の本を読んで自分が抱いたイメージです。天上の家ですからね。敷地の上に物理的に黄道12宮がどーんと直接建造されているという意味ではモチロンないですが。無理やり例えて言うと。カラダに精神や意識が宿っているというような。そういうふたつの次元の異なる領域が重なり合って一体化しているというイメージです。

で。上記からさらに連想したのは。wholeサインのハウスシステムって、けっこう理にかなってるかも？ということでした。不動産で例えると東京と千葉にまたがって家が建つてるとするのは。なんだか変な感じがします。東京には東京で家をちゃんと建てて。県境を越して隣の千葉では千葉でちゃんと家が建つてるという方が。自分としては自然な感じがしてきたのです。

それに。例えば今の4ハウスの「父親」を表わす場所にですよ。ふたつの惑星の住み家であるサインが、場所の両端から建てられていて。さらにそのふたつの家の隙間に挟み込まれるように、さらに別の惑星の住み家が建てられているというのは。。土地が狭くてごみごみした東京の下町や香港でもあるまいに、というか。なんとも変てこな感じがだんだんして。

それなら、レジオモンタナスやプラシーダス等の他のハウス・システムはなんなのだと。いうと。これはこれで。自分は勝手に納得している部分がありまして。例えていうと家ならば大黒柱があるように、その家にはその家の要の位置というのがありそうな気がして。（風水チックなイメージですけど）

土地や場所にもその中心となる、コアな位置、ポイントがやはりあるハズで。そういった「場所（今のハウス）」の要となるポイント（今でいうハウスカスプ）を割り出すのが各種ハウスシステムの利点なのではないかと。それを家であるサインの度数にあてはめて。サイン毎のアルムーテンを調べたりしてというのは。これはこれでおおいに有りなんでは

？と、逆に思うようになりました。

つまり。ハウスシステムがいろいろあるのは。その「場所」（今のハウス）の最も影響の強い位置を割り出すため。その場所の上に建てられた家（サイン）の度数に当てはめることで。その「場所」がその「場所」である最たる特徴を、サイン（家）のその度数で調べることができるからではないか？と思うようになりました。

で。北斗柄さんが書かれていたように。確かに、「地上の事柄＝（今の）ハウス」「サイン（惑星の家）＝天上の象徴」が一体化した姿こそが、ホロスコープ・チャートのミソだと思うのです。

で。自分は。今はどうしているのかというと、「場所」（今のハウス）とサインとを一体化させて「ひとつの家、建造物」として全体を眺め、俯瞰したい時にはwholeサインを。その「場所」（今のハウス）のキモとなるポイントを見分けたい時、特に事象、現象、地上の事柄にフォーカスして調べたい時には（ホラリーとかイベント図とか）レジオモンタナスやコッホ等のハウスシステムを使いますが、時と場合に応じて（または同時に）いくつかのハウス・システムを併用しつつ、その事象の現れ方や意味を比較し検討するようになりました。

そして大昔には。「今のハウス」のように。それぞれを番号で「1ハウス」とか「2ハウス」というようには呼ばずに、「今の1ハウス」であれば、トレミーは「HOROSCOPE」、マニリウスなら「STILBON」、ファミカスだと「VITA」というように、名前で呼んでいました。

また「今のハウス」のように、反時計まわりに番号が付く前には。大昔の「場所」（今のハウス）は、時計まわりの順に、今の1ハウス、12ハウス、11ハウスという順に1周しながら、ASCで生まれて、MCで働きざかりの壮年、DSCで老いて、そしてまた死んで生まれ変わってという、人生の「生老病死」を「今のハウス」の逆まわりで描いていたとのことで。自分はこれもまた。とても面白いなと感じます。

さらにダメ押しが。今の円形とは異なる「方形」のホロスコープのあのカタチです。ある方の翻訳日記シリーズでもご紹介があったように。方形のホロスコープのアングルの4つのハウスに対して。それぞれの両側のふたつのハウス（サクシデント、カデント）が3つで1セットなら。今の12ハウスでいえば、「12ハウス&1ハウス&2ハウス」、「8ハウス&7ハウス&6ハウス」という、アングルを基点にした両脇のハウスが3つで1セットになっているのなら。妙に納得が行く気がします。

このことから。「12ハウスと6ハウス」の在り方の謎が。自分なりに少しずつ解けてきたように思うのです。次に。ギリシア期のアスペクト（注視、見ること）とサインの関係性についてもざっとまとめてみます。

くりまる

2006年10月28日 03:44